

『つぐない』 原題 Atonement (2007)



© 2007 Universal Studios. All Rights Reserved.

映画紹介

『つぐない』 *Atonement* (2007)

塚田三千代

本映画は 1930 年代という時代を背景に、日常の経験や、人間関係、さまざまな感情、選択をせまられ決定という行為を描いて現代との接点を探る秀作である。現代イギリス文学の代表作家イアン・マキューアンの「贖罪」を、「プライドと偏見」のジョー・ライト監督が映画化したのだが、最愛の幼い妹がついた「うそ」が人の運命を変えてしまうことになった、という設定で、いわば罪の償いと永遠の愛を社会背景の中で探ることに焦点をおいている。

英語教育や映画英語 (SCREEN ENGLISH) 研究に役立つ映画である。上級者向きに、原作小説との比較研究が興味ふかい。テーマは贖罪・愛・時代の差異を見る。



<ストーリー>

1930年代、戦火が忍び寄るイギリス。妹ブライオニーが真実だと言った証言は事実とはまったく違っていった。それが姉セシーリアとその初恋の人、ロビーとの人生を変えてしまうことになろうとは…。幼かったからではすませられない贖罪、ブライオニーは大人になるにつれそれに気付き、そのつぐないを背負って…



つぐない
Atonement



妹の虚偽証言が正されないまま、軍隊に入隊して3年半が過ぎた今、ロビーには、過ぎた瞬間が細切れの幻のように思えるのだった。セシーリアはもう一度あの時に戻ってとただ一途に祈るだけであった。

Robbie Turner: ... if all we have rests in a few moments in a library three and a half years ago, then I don't know... I don't ...

Cecilia Tallis: Robbie... look at me. Look at me. Come back. Come back to me.

【映画情報】

- ・第 65 回ゴールデン・グローブ賞の作品賞<ドラマ部門>、作曲賞受賞。
 - ・80 回アカデミー7部門<作品賞・脚色賞・助演女優賞・撮影賞・美術監督賞・衣装デザイン賞・作曲賞>にノミネートされ、作曲賞を受賞した。
 - ・監督:「プライドと偏見」のジョー・ライト
 - ・原作:現代英国文学の代表作家イアン・マキューアンの「贖罪」
 - ・脚本:クリストファー・ハンプトン
 - ・主演:キーラ・ナイトレイ、13歳の妹役:シーアンシャ・ローナン
 - ・4月12日(土)、新宿テアトルタイムズスクエア、日比谷シャンテ シネほか全国順次ロードショー
- 公式サイト URL <http://www.tsugunai.com/>
©2007 Universal Studios. All Rights Reserved.
配給 東宝東和

[参考資料]

- ・Genre: Drama / Romance / War
- ・MPAA: Rated R for disturbing war images, language and some sexuality.
- ・Language: English, French

STAFF:

Director: Joe Wright

Writers: Ian McEwan (novel)

Christopher Hampton (screenplay)

CAST:

Saoirse Ronan ... Briony Tallis, aged 13

Ailidh Mackay ... Singing Housemaid

Brenda Blethyn ... Grace Turner

Julia West ... Betty

James McAvoy ... Robbie Turner

Harriet Walter ... Emily Tallis

Keira Knightley ... Cecilia Tallis

Juno Temple ... Lola Quincey

Felix von Simson ... Pierrot Quincey

Charlie von Simson ... Jackson Quincey

Alfie Allen ... Danny Hardman

Patrick Kennedy ... Leon Tallis

Benedict Cumberbatch ... Paul Marshall

Peter Wight ... Police Inspector

Leander Deeny ... Police Constable

スタッフ

ジョー・ライト (監督)

ティム・ビーヴァン (プロデューサー)

エリック・フェルナー (プロデューサー)

ポール・ウェブスター (プロデューサー)

クリストファー・ハンプトン (脚本)

イアン・マキューアン (原作者)

シーマス・マクガーバー BSC (撮影監督)

サラ・グリーンウッド (美術監督)

ジャクリーヌ・デュラン (衣装デザイン)

イヴァナ・プリモラック (メーキャップとヘアデザイン)

ジーナ・ジェイ (キャスティング・ディレクター)

ポール・トシル A.C.E (編集)

ダリオ・マリアネッリ (音楽)

ジャン＝イヴ・ティボーデ (ピアノ) Jean-Yves Thibaudet

配役

キーラ・ナイトレイ (セシーリア タリス家の長女)
 ジェームズ・マカヴォイ (ロビー・ターナー タリス家の使用人の息子)
 シアーシャ・ローナン (ブライオニー タリス家の次女 13歳)
 ロモーラ・ガライ (ブライオニー 18歳)
 ヴァネッサ・レッドグレイブ (ブライオニー 老年)
 ブレンダ・ブレッシン (グレース・ターナー タリス家の使用人 ロビーの母親)
 パトリック・ケネディ (リーオン タリス家の長男)
 ハリエット・ウォルター (タリス夫人 セシーリア、ブライオニーの母)
 ベネディクト・カンバーバッチ (ポール・マーシャル リーオンの友人)
 ジュノー・テンブル (ローラ・クインシー セシーリア、ブライオニーの従姉妹)
 ジーナ・マッキー (シスター・ドラモンド 看護主任)

DVD チャプター紹介

DVD発売元 *****

	Title (E)	タイトル (J)	推奨度
C-1			
C-2			
C-3			
C-4			

●撮影に使われた場所

・ストークセイ・コート

シュロプシャー州にある私有のストークセイ・エステートの一部をなしている、ビクトリア建築の屋敷、ストークセイ・コート。ここでは、タリス邸のすべての屋外と屋内、さらにロビーとグレースの住居小屋のシーンが撮影された。

・ロンドンのロケ地

ロンドンでは、ベスナルグリーンのおールド・タウン・ホールを、セシーリアとロビーが1935年のティー・ハウス以来、初めて出会う場所として使用した。

ポール・マーシャルとローラの結婚シーンは、スミス・スクエアのセント・ジョン・チャーチ、『イングリッシュ・ペイシエント』(96)のアカデミー賞監督アンソニー・ミンゲラが、インタビューア役で出演している。 *ミンゲラ氏は2009年逝去。

・フランスの田園風景

ロビー、メース、ネットルの三人がフランスの田園地帯をダンケルクまで退却して

いくシーンは、リンカーンシャーのコーツとゲドネイ・ドロブ・エンドや、ノーフォークのウォルポール・セント・アンドリュースとデンバー、ケンブリッジシャーのマーチとピモアの各ロケ地で撮影された。

・軽工業地帯のシーンはグリムズビーの漁船ドックで撮影された。

・ダンケルクのブレイ砂丘のシーンは、レッドカーの浜辺で撮影。

・ジャン・ギャバン、ミシェル・モルガン主演、マルセル・カルネ監督作『霧の波止場』(38)がスクリーンに映し出される映画館のシーンは、棧橋の上にあるオールド・リージェント・シネマが使われた。

●イアン・マキューアン (原作者)の著書紹介

公式サイト <http://www.ianmcewan.com/>

『最初の恋、最後の儀式』(75) 短編集 *First Love, Last Rites*

『ベッドのなかで』(78) 短編集 *In Between the Sheets*

『セメント・ガーデン』(78) *The Cement Garden*

『異邦人たちの慰め』(81) *The Comfort of Strangers*

『Rose Blanche』(85) 児童書

『時間の中の子供』(87) *The Child in Time*

『イノセント』(89) *The Innocent*

『黒い犬』(87) *Black Dogs*

『夢見るピーターの七つの冒険』(94) 児童書 *The Daydreamer*

『愛の続き』(97) *Enduring Love* 新潮文庫

『アムステルダム』(98) *Amsterdam* 新潮文庫 *1998 年度ブッカー賞受賞

『贖罪』(01) *Atonement* 新潮文庫 *全米批評家協会賞 *英国 W・H・スミス賞
受賞

『Saturday』(05)

『On Chisel Beach』(07)

●『贖罪』について

訳者あとがき(p.443)より引用

「・・・愛の後にあるのは忘却だけ。おそらくそこに、愛という(アイロニー抜きの)行いを語る言為、ラブ・ストーリー・テリングに内在する最大のアイロニーがあるのだろう。『贖罪』の語り手ブライオニーは自分が犯した罪——ひとつの愛を無残に破壊したこと——を贖うために、生涯かけて一遍の愛の物語を改稿しつづける。けれども、愛し愛されたものたちはもはやこの世にいない。小説家ブライオニーも言うとおり、神ならぬ小説家にとって贖罪は不可能なのだ。愛を語ることは、語り手が空にかける希望の橋に他ならないのである。小説家ブライオニーを描く小説家マキューアンも、そのことは知りつくしているに違いない。」

●ジョー・ライト監督とクリストファー・ハンプトン脚色者について

ライトは『プライドと偏見』では、原作のストーリーを構築しなおして、現代の観客に物語の時代や背景を越えたものを伝えることに成功したので、今回は「贖罪」というテーマに挑んだ、と言っている。脚本を担当したハンプトンは、「ある時代を描くことが厳密であればあるほど、物語の現代的な面がさらに鮮やかに見えてくる、というのがぼくの持論だ」と、考えを述べている。